

令和 3 年 4 月 19 日現在

機関番号：33932

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01747

研究課題名(和文) 最重度身体障がい者のフィットネス向上と車いすダンスムーブメント

研究課題名(英文) Improving the physical strength of severe disabilities and wheelchair dance movement

研究代表者

寺田 恭子(Terada, Kyoko)

桜花学園大学・保育学部・教授

研究者番号：20236996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：われわれの先行研究では車いすダンスの運動強度は約3METであることが明らかとなった(n=6)。一般的に、3METに相当する運動強度は安静な人たち、例えば、重度脳性麻痺がある人たちにとって有益とみなされている。このような理由から、われわれは車いすダンスを様々な団体やサークルに属する重度脳性麻痺の人たちに紹介しようと試みた。また、タイとインドネシアでも車いすダンス講習会を開催した。世界的な新型コロナウイルス感染症の蔓延によって国内外の活動は妨げられたが、車いすダンス教習用ビデオを作成し、国内の特別支援学校に配布した。ビデオはオンラインで視聴可能である(YouTube)

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、重度の身体障がいがあっても、運動の継続により体力向上の可能性のあることを明らかとし、さらにその方法を車いすダンスという形で重度身体障がい者に提供することができたことは学術的な意義および社会的にも大変意義があることであると思う。今回は特にその方法を全国の特別支援学校にDVDとして配布し、返答があった学校にはその後のフォローも継続して実施する予定である。研究成果が実践に結びつき、現場に広がっていくことには大きな意味がある。

研究成果の概要(英文)：In our previous study, we found that the exercise intensity of wheelchair dance was about 3MET for the individuals with severe cerebral palsy (n=6). Generally speaking, the exercise intensity equivalent to 3MET is thought to be beneficial to those who are sedentary, such as individuals with severe cerebral palsy. That was why we tried to introduce wheelchair dance to individuals with severe cerebral palsy who belonged to various kinds of organizations or circles. Also, we held wheelchair dance classes in Thailand and Indonesia. Despite our activities both domestic and abroad being hampered by COVID 19 pandemic, we made instructional DVD of wheelchair dance and distributed them to schools for children with special needs in Japan. The DVD is now available on internet, too (YouTube).

研究分野：アダプテッド・スポーツ

キーワード：車いすダンス 重度身体障がい者 ムーブメント

## 1. 研究開始当初の背景

脳性麻痺者は、健常者以上に年齢と共に活動量が減少し、また GMFCS のレベルが重度になるほどその低下は顕著となる。よって、健常者より比較的早期に寝たきり状態になる傾向にある。この理由は、脳性麻痺者では、(1) 加齢による身体機能の低下が早期に起こること (Turk, 2009)、あるいは (2) 特別支援学校等を卒業後、日常生活での活動量が減少し、種々の疾病 (II 型糖尿病あるいは循環器疾患など) を発症するリスクが高まることにある。

これらの現状を鑑みると、疾病発症の最たる要因は、長期に渡る運動不足によって、呼吸循環器系持久力が低下することであると言える (Rimmer, 2005)。障がい者が日常生活を継続して地域コミュニティで日常生活を送るためには、呼吸循環器系持久力がとりわけ必要である最重度の身体障がい者は運動やスポーツに親しむ機会がほとんど無く、そのような活動の埒外に置かれている状態が長く続いていた。彼らへの身体活動の重要性は指摘されながらも、運動が彼らの身体に及ぼす影響については、研究がほとんど見当たらなかった。Rimmer (2005) は、加齢による機能低下を相殺するためにも、脳性麻痺者はより高いフィジカルフィットネスを実践すべきだと指摘している。

このような現状が指摘されている中で、より重度の障がいのある脳性麻痺者は運動やスポーツの必要性を指摘されながらも、実践する具体的方法がほとんど無く、運動やスポーツの埒外に置かれた状況が長く続いていた。脳性麻痺児・者のフィットネス研究の第一人者である Maltais et al. (2014) は、「究明されている部分が希薄なレベル GMFCS Level IV 脳性麻痺者の呼吸循環器系機能については、研究を推進すべきであり、脳性麻痺特有の複雑な生活習慣行動(ふるまい)や環境因子にも着目して、有用な運動処方を考えていかなければならない」と言及している。

そこで我々は、GMFCS Level の脳性麻痺者に着目し、「アクティブ・アシスト・ムーブメントによる重度身体障害者車いすダンス」(期間 2013 年～2016 年度：科学研究費 課題番号 25350801 研究代表者 寺田恭子)の研究において、GMFCS Level の最重度脳性麻痺者の車いすダンス実践が、彼らの身体に様々な影響を及ぼすことを明らかにすることに成功した。それを基にして本研究は、その時点での実践活動の場としていた公的施設から活動の場を広げ、民間施設においても車いすダンスの継続的な実践活動を増やし、被験者数を増やして、車いすダンスの継続的な実践が彼らの体力向上に及ぼす影響を探ろうとした。また最重度脳性麻痺者も実践できる運動方法(車いすダンス)の認知度を高めるために、本実験で得られたデータをエビデンスとして車いすダンス継続実践の意義と方法を国内外に広めたいと考えた。

## 2. 研究の目的

GMFCS Level を含めた最重度身体障がい者の車いすダンス継続によるフィットネス向上を、自律神経系の変化や日常生活心拍数変化と併せて様々な角度からさらに究明する。また、多様な施設での継続実践とその定着方法を蓄積し、2020 年には重度身体障がい者の身体活動の必要性への理解を定着させ、国内外での最重度身体障がい者の車いすダンス実践を増やし活動を定着させることを目的とする。また最重度身体障がい者と運動・スポーツに対する従来のイメージを払拭するために、活動の見える化を目指す。

## 3. 研究の方法

2016 年度までの研究結果をベースとして、最重度身体障がい者の大多数を占める最重度脳性麻痺者の車いすダンス継続の意義と方法を最重度身体障がい者が集まる集団に提供し、車いすダンスの定着と継続を集団に合わせた形で支援する。また、最重度身体障がい者が安全に運動を継続するための運動と栄養(エネルギー摂取)に関しては、実験データからその実態を明らかにする。なお、最重度身体障がい者も実践できる車いすダンス方法の提供として動画を作成し、配布したのち実践に関するフォローアップを行って定着度を視覚化する。

## 4. 研究成果

### 1) 国内での実践的活動

日本国内では、刈谷市立刈谷特別支援学校で車いすダンスを実施した。2018 年には保護者および教職員と最重度身体障害のある生徒を含め、車いすダンスを実践し、また車いすダンスの意義や身体に及ぼす影響については、保護者および教職員を対象にレクチャーした。愛知県社会福祉協議会との協力で 2018 年 11 月 10 日に開催された、愛知県・愛知県社会福祉協議会主催ふれあい交流会(車いすダンス)では、受講した生徒と保護者が参加した。このような活動への参加から車いすダンスへの理解を促し、2019 年度は 9 月から 10 月にかけて、刈谷市立刈谷特別支援学校にて合計 4 回の講習会を実施するに至った。10 月 27 日の愛知県・愛知県社会福祉協議会主催のふれあい交流会(車いすダンス)では、車いすダンスを学んだ生徒たちのダンス発表を実施した。参加した保護者からは、車いすダンスに対する肯定的な反応が見られた。また自ら言葉を発せない子どもたちの代弁者として、子どもたちが楽しく活動に参加できていたことを伝えてくれた。

特別支援学校での車いすダンスの活動が一つのモデルケースとなり、その後は車いすダンスの指導者の育成も視野に入れて活動を行う予定だった。特に2020年度は、小垣江東小学校とのコラボレーションを行い、障がいのない児童たちとの交流としての車いすダンスの継続でステップアップする予定であったが、新型コロナウイルスの蔓延によって全ての活動を休止せざるを得ない状況となった。2020年度は、新型コロナウイルスの蔓延により直接的な車いすダンスの指導や定着に向けての活動はできなかったが、この間に愛知県社会福祉協議会との連携で、車いすダンス講習をオンラインで実践できるような体制作りを考え、最終的には豊田市立豊田特別支援学校生徒とのオンライン講習を2020年3月に実現することができた。

## 2) 国外での実践的活動

### a) タイにおける取り組み

重度身体障がい者が集団として車いすダンスを学ぶことができるという現状は、サポート体制や地域場所によって多様な障壁があることがわかり、集団での実践がより可能であるタイとインドネシアへの実践、車いすダンスの定着を試みた。この背景には、本研究代表者が認定NPO法人アジア車いす交流センター(WAFCA)の理事として10年に渡り両国の一定の障がいのある子どもたちの現状を把握していたことや、タイやインドネシアの重度障がい児者が求めている活動に車いすダンスがマッチしていたこと、さらにタイにはアジア車いす交流センタータイ(WAFCAT)、インドネシアには同様にWAFCAIが存在することから、現地での講習後に日本からのサポート内容を現地スタッフに伝えることで、継続・定着の可能性があると考えた。

2017年度はタイに渡航し、WAFCATのスタッフと今後の車いすダンスの活動と計画について話し合い、さらにバンコク周辺の学校、施設、民間団体を訪問しタイの障がい児の教育の一端を見学した。その中からタイの障がい児財団の親子を対象グループとし、パイロット事業として2017年9月にナコンナヨック県で車いすダンス宿泊キャンプを実施した。さらにその半年後にはWAFCATのメンバーが参加者のフォローアップ調査を引き受けてくれた。その結果、多くの親子が車いすダンスを可能な範囲で継続し、子どもの機嫌がよくなったが、自宅で一人(親子)でやっても楽しくない、みんなで集まってやりたい、誰かが声をかけてくれたら参加したい等の意見が挙がった。そこで、車いすダンスの継続・定着には、保護者グループのリーダーの育成が必要であるという結論に達し、リーダー育成を念頭に置いて、車いすダンスのキャンプの実践を再計画する運びとなった。以下は2018年のキャンプの概要である。

日程：2018年12月15日(土)16日(日)

会場：Forum Park Hotel

Soi Chan 2 Road, Thungwatdon, Sathorn, Bangkok 10120 Thailand

参加者：保護者グループ(自助グループ)10組

サムットプラカーン県特殊教育センター2組

ラヨン県特殊教育センター1組

トラト県特殊教育センター1組

チャンタブリー県特殊教育センター1組

脳性麻痺児19名、保護者20名、同伴者11名 計 50名

#### 【保護者グループについて】

保護者グループとは、バンコクで活動しているNGO団体(障害児財団)で動作法、タイマッサージなどの訓練を受けた保護者の一部が、障害児財団から独立する形で地域に集まり、自助グループとして活動している組織である。特にバンコクにあるノンケム(Nong Kham)地区の代表者(サン君(30歳)の母親ルンさん)は、月15,000バーツ(約5万円)で家を借り、ラーニングセンターを運営している。現在のメンバーは、約70名の脳性麻痺児とその家族である。彼らは、月曜日と火曜日にセンターに集まり、メンバーと共にリハビリ訓練を実施している。寄付金や助成金はセンターの運営資金に充てていると言う。母親代表のルンさんは、毎週月曜日火曜日にセンターに集まったときの活動に車いすダンスを取り入れたいと考えている。地域で車いすダンスを披露するチャンスがあれば、それを目標にして継続的に練習ができるのではないかと期待している。

#### 【キャンプに参加しての保護者の感想】

- ・短い時間ダンスをただけなのに、子どもの筋肉が緩んでリラックスしたことがわかり、とてもびっくりした
- ・車いすダンスは子どもの身体に(何かしらの)効果があると思う。
- ・音楽をかけて一緒に踊ると自然と笑顔になる。
- ・子どもたちが笑顔になれる活動なので続けたい。
- ・私達(保護者)と一緒に楽しめるのがよい。
- ・私たち(保護者)のよい運動になった。
- ・簡単そうに見えても、実際にやってみると難しかった。
- ・初めての経験でとても興奮している。
- ・このキャンプに参加したいという母親がいたのに、パートナー(夫)に参加すると言われて、今回参加できなかった人もいてとても残念だった。
- ・イメージしていたものと違い、重い障がいのある子どもも一緒にできるので楽しかった。

・私達で今後も続けていきたい、など

タイにおける車いすダンスは2019年8月にも一泊2日で実施した。2018年12月の指導後から、週に1回の車いすダンスが継続され、彼らのライフワークの一つとして車いすダンスが存在していることがわかった。また保護者たちは、自らがタイでの車いすダンス指導者としての先駆者となり、多くの仲間たちに車いすダンスの楽しさを伝えていきたいと語った。

#### b) インドネシアにおける取り組み

インドネシアも2017年からWAFCAIと協働し車いすダンスを展開した。2017年8月と2020年2月にジャカルタにあるサヤップイブ財団で実践を行なった(どちらも一泊2日、財団の敷地に実施)。

サヤップ・イブ財団は1955年にジョグジャカルタで設立され、ジャワ島西部に3拠点を持つ社会省管轄下の財団である。訪問先の施設は、親と暮らせない子どもの療育と近隣に住む障がい児も含めたりハビリテーションおよび障がい児への教育支援等を行なっている。5歳から23歳までの男女35名と先生および2交代制の介助スタッフが共に生活している。知的障がい児はこの施設から学校に通い、重度障がい児の毎日の通院送迎は教員が担当する。現在では特別支援学校の役割も備えているので車いすの子どもは内部通学をするが、重症心身障がい児は市内に受け入れ先の学校がなく、十分な教育を受けることができない。

インドネシアでは県レベルで1校しか特別支援学校がない故、障がい別の学校もない。通学は聴覚障がい児、知的障がい児、松葉杖使用児などが優先される。このような現状から、本校は内部に特別支援学校を作り、空き地に学校を建設し、保護者がいても重度障がいの子もたちが通学できる教育環境を作ろうと計画している。

ここでは、教員が中心となり、週に1回の練習を2017年の講習後から実施し、車いすダンスは財団に所属する子どもたちの日課となっていた。訪問者への歓迎として車いすダンスを披露することもあり、さらに様々なダンスを学んでいきたいという強い意欲が感じられた。なお、2020年2月の講習以降は新型コロナウイルスの蔓延で再度の講習が不可能になった(タイおよびインドネシア)。その中でもオンラインで車いすダンス競技会を開催してはどうかなど、サヤップイブ財団からは積極的な提案があった。それらを受けて、コロナ禍ではタイやインドネシアで車いすダンスを実践している人たちへ講習DVDを作成し送付することとなった。なお、このDVDはYouTubeでも観られるようにし、タイ語およびインドネシア語の翻訳を字幕につけた。

#### 3) DVD送付とアンケート調査

2020年度は新型コロナウイルスの世界的蔓延によって多くの地域に渡り車いすダンスの活動を展開し、それぞれが繋がって事業を起こすことが不可能となった。そのために日本国内と海外に向けての車いすダンス講習DVD(重度身体障がい者も可能なダンス方法)を作成した。国内では、愛知県内の障がい者施設(206件)および全国の特別支援学校(350校)に送付した。簡単なアンケートを同封し、車いすダンスに関する知識や実戦に対する興味について質問をした。なお、これらのアンケートの締め切りは4月末日である。このアンケートのデータ集計も活用し、2021年度からの研究にも役立てる予定である。

また、本研究者が拠点である愛知県内の車いすダンス団体に対して、コロナ禍における活動状況と自粛中の健康状態に対してアンケート調査を行なった。一つは自主走行が可能な人たちと障がいのない人で実施している団体(A)で、もう一方は重度障がい者とその家族で活動する団体(B)である。

アンケートは全13項目で、記述式の他に4段階の選択肢を1つ選択する項目、質問内容によっては複数選択が可能なものも取り入れた。(A)で障がいのある人たち28名の回答は、「自粛期間中に何らかの身体活動を行なったか」に対して、「活動しなかった(44.4%)」、「活動した(55.6%)」であった。活動しない理由として「家の中ではやりにくいから」、「いつもの仲間と一緒にやりたかったから」、「一緒にやる人がいないから」、「運動するためのサポートが得られなかったから」が上がり(記述式回答)、回答の全てはトライアングルメンバーの記述であった。何らかの活動をした人は「自宅で筋トレをした」、「散歩をした」、「買い物をした」などであった。因みに、運動をしなかった人の全てが、身体活動を「少しはやりたかった(37.5%)」、「非常にやりたかった(62.5%)」と回答している。車いすダンスを休止したことによる心身の変化があるかという質問では、「体力の低下を感じる(33.3%)」、「身体の痛みやだるさの増加(23.5%)」、「体重の変化(11.8%)」、「生活リズムの変化(17.6%)」、「睡眠障害(6%)」、「食事量の変化(6%)」、「気持ちが塞ぎ込む(11.8%)」、「寂しいと感じることが増える(35.3%)」であった。生活リズムの変化、睡眠障害、食事量の変化、気持ちが塞ぎ込む、寂しいと感じることが増えるという5項目においては、自粛生活での心身の変化と車いすダンスの休止の回答が一致していた。「自粛期間中にどのようなサポートがあったら良かったか」という問いに対しては、「車いすの人が参加できるエクササイズ動画配信(52.9%)」、「振り付けを覚えられるような動画配信(44.4%)」、「Zoomなどによるリモ-

トでの練習(27.7%)」,「感染予防をした上で、指導者や仲間が訪問によって一緒にダンスをする(22.2%)」,「YouTube やテレビなどで身体障がいのある人も参加できるような運動をもっと流してほしい(38.3%)」(複数回答可)であった。

全員が施設に通っている(B)9名の自由記述では、通所施設が閉鎖にはならなかったため日常のリズムは崩れなかったものの、アンケートで答えたように体力の低下や寂しいと思うことが増えたという回答が目立った。また、ダンスを今後も継続していけるかどうか親子で検討中であるという回答もあった。実際に、2021年度に入ってから今後の活動は休止するという親子が4組あり、コロナ禍での生活が今後の活動のあり方に影響を及ぼしたと言える。

#### 4) 車いすダンスのエネルギー消費量および身体に及ぼす影響

最重度脳性麻痺者が1週間に3回程度、6分から15分の車いすダンスを実践した時のエネルギー消費量は、1日の総エネルギー消費量のわずか2%にすぎないことが明らかになった。また健康状態を知るアルブミンやヘモグロビンの数値は、6ヶ月間の継続トレーニングの間での変化は確認されず、皆良好であった。体脂肪や体重についても変化は見られなかった。よって、車いすダンスの週3回程度、1日15分程度のエクササイズは、健康状態を損ねることなく実施できることがわかった。

#### 引用文献

Turk MA (2009). Health, mortality, and wellness issues in adults with cerebral palsy. *Dev Med Child Neurol* **51 Suppl 4**, 24-29.

Rimmer JH (2005). Exercise and physical activity in persons aging with a physical disability. *Phys Med Rehabil Clin N Am* **16**, 41-56.

Maltais DB, Dumas F, Boucher N, & Richards CL (2010). Factors related to physical activity in adults with cerebral palsy may differ for walkers and nonwalkers. *Am J Phys Med Rehabil* **89**, 584-597.

寺田恭子. アジアの子どもたちへの車いすダンスの普及および継続方法に関する研究1. 桜花学園大学保育学部研究紀要第20号 pp119-132, 2019

寺田恭子. アジアの子どもたちへの車いすダンスの普及および継続方法に関する研究2. 桜花学園大学保育学部研究紀要第22号 pp63-76, 2020

Terada K, Satonaka A, Wada M, Terada Y, SUZUKI Nobuharu, Nutritional aspects of a year-long wheelchair dance intervention in bedridden individuals with severe athetospastic cerebral palsy rated to GMFCS level V.

*Gazz Med Ital* **177** 360-366, 2018

寺田恭子. 新型コロナウイルス感染拡大に夜サークル活動自粛の影響. 日本障がい者体育・スポーツ研究会研究紀要第44集, pp22-23, 2021

寺田恭子. 車いすダンスプロジェクト in インドネシア報告. 桜花学園大学・名古屋短期大学 チャイルドエデュケア研究所年報第17号, pp7-8, 2019

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 寺田恭子	4. 巻 20
2. 論文標題 アジアの子どもたちへの車いすダンスの普及および継続方法に関する研究 1	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 119-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 寺田恭子	4. 巻 1
2. 論文標題 車いすダンスが重度脳性麻痺者の呼吸循環器系に及ぼす影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島大学学術情報リポジトリ	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 寺田恭子	4. 巻 42
2. 論文標題 パラリンピックとアーツ～車いすダンスの可能性～	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本障がい者体育・スポーツ研究会紀要	6. 最初と最後の頁 24-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 寺田泰人、寺田恭子	4. 巻 第19号
2. 論文標題 重度身体障がい児・者に対する身体運動の支援（第二報）主体的・継続的实践を目指して；	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 161-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木伸治、里中綾子、寺田恭子	4. 巻 10
2. 論文標題 重度脳性麻痺者のエアロビックフィットネスー組織的介入から家族を単位とした社会的介入へー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 常葉大学紀要	6. 最初と最後の頁 7-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kyoko TERADA, Ayako SATONAKA, Yasuto TERADA, Nobuharu SUZUKI	4. 巻 177
2. 論文標題 Nutritional aspects of a year-long wheelchair dance intervention in bedridden individuals with severe athetospastic cerebral palsy rated to GMFCS level V	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Gazzetta Medica Italiana Archivio per le Scienze Mediche	6. 最初と最後の頁 360-366
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.23736/S0393-3660.17.03569-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kyoko TERADA, Ayako SATONAKA, Yasuto TERADA, Nobuharu SUZUKI	4. 巻 5
2. 論文標題 Training effects of wheelchair dance on aerobic fitness in bedridden individuals with severe athetospastic cerebral palsy rated to GMFCS Level	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 EUROPEAN JOURNAL OF PHYSICAL AND REHABILITATION MEDICINE	6. 最初と最後の頁 744-750
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木伸治、里中綾子、寺田恭子	4. 巻 9
2. 論文標題 (総説) 重度脳性麻痺者のエアロビックフィットネス 組織的介入から家族を単位とした社会的介入へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保健医療学部紀要 (常葉大学)	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田泰人、佐々木直美、寺田恭子、里中綾子、鈴木伸治	4. 巻 97
2. 論文標題 重度身体障がい児・者に対する身体運動の支援 - 医療型障がい児・者入所施設での車いすダンス実施後のアンケート調査結果より -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名古屋経済大学人文科学論集 The Journal of Science of Culture and Humanities	6. 最初と最後の頁 103-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木伸治、里中綾子、寺田泰人、寺田恭子	4. 巻 9
2. 論文標題 (報告) 国際交流 カリフォルニア州立大学チコ校訪問	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保健医療学部紀要 (常葉大学)	6. 最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田恭子	4. 巻 23
2. 論文標題 アジアの子どもたちへの車いすダンスの普及および継続方法に関する研究 2	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桜花学園大学保育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 寺田恭子
2. 発表標題 車いすダンスが重度脳性麻痺者の呼吸循環器系に及ぼす影響
3. 学会等名 ワークフィジオロジー研究会2020
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 寺田恭子
2. 発表標題 タイにおける重度障がい児の身体活動-自助グループとNPOの協働プログラムを通して-
3. 学会等名 第29回日本障がい者スポーツ学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺田恭子
2. 発表標題 パラリンピックとアーツ-車いすダンスの可能性-
3. 学会等名 第42回日本障がい者体育スポーツ研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 寺田恭子
2. 発表標題 タイにおける車いすダンスの試み-GMFCS Level I の障がい児を中心に-
3. 学会等名 第41回日本障がい者体育スポーツ研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 寺田恭子
2. 発表標題 コロナ禍における車いすダンスの楽しみ方-タイ・インドネシアの障がい児を中心に-
3. 学会等名 日本アダプテッド体育・スポーツ学会 第25回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 (公財)日本障がい者スポーツ協会 [編]	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 252
3. 書名 障がいのある人のスポーツ指導教本(初級・中級)2020年度改定カリキュラム対応	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 伸治  (Suzuki Nobuharu)  (50393153)	常葉大学・保健医療学部・教授   (33801)	
研究分担者	里中 綾子  (Satonaka Awake)  (80632497)	びわこリハビリテーション専門職大学・リハビリテーション学部・講師   (34207)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------